

死の形

今日の「灯」（五月二十九日）に坂本茂木さんは死ぬ時は格好よい姿だと祈っておられる。私が青年団運動で県内を走り回っていたころ、君はまだ少年陶工。「指だけは気をつけています」。隅っこからの凜とした自己紹介が忘れられない。格好よいとは自分で満足のいく姿であろう。

自分の人生を望月のようだと満足し切った藤原道長の臨終は、うからやからを枕頭に集め、あみだ像の掛け軸に結んだ絹ひもを手にして旅立った。一つの理想的な姿である。

人間の生活の大事な点は、ありがとうとさようならのあいさつが分厚く繰り返される生の中身である。身内はもちろん多くの恩人知人にこの最後のあいさつもできないままのわが死がたまらない。

道長でさえわずかの身内に限られていた。だから、かなえられるはずのない願い。「一期一会」はその迷いを解き放す古人の究極の思想だった。

せめて年賀などのごあいさつ状には、そつと「**幸**くてませよ」と書き添えている。わが良寛が死近きを予想してまな弟子**貞心尼**に告げた「いざさらば幸くてませよほととぎす屢鳴く頃にまたも来て見ん」の歌から拝借したものである。

多くの人がぼっくり死にたいと願っている。それは、しかし、今ぼっくりではない。飽きるほど長命して、おしめなし、ほけなし、苦なしで死にたい。死を前にして何と欲深いことよ。

お釈迦さまは下痢続き、おむつのまま逝かれた。昭和の優れた宗教人、金子大栄さんは九十歳を過ぎてこう詠んで往生された。「ナムアミダ寝たきり三年の恩ふかし」。その句の前には「寝たきりゼロ作戦」などと厚生省や福祉亜流の者たちが言いつのる言葉の何とむなしく高慢なことか。

(一九九七年六月三日)